

東歌「麻素武良可伎武太伎」考

椎 名 嘉 郎

一

萬葉集卷十四の東歌に次の歌がある。

可美都氣努 安蘇能麻素武良 可伎武太伎 奴礼杼安

加奴乎 安杼加安我世牟

〔訳文〕 上毛野の安蘇のま麻群 かき抱き 寝れど飽

かぬを あどか我がせむ

(三四〇四)

夏、七月中旬になると、掲出歌の故地とされている栃木県安蘇郡の山間部の農村に、歌にちなんで私はここ十数年、麻畑や麻の取入れの風景写真を撮るべく出向くのが慣わしになつてゐる。

圧倒的な化学繊維の普及によって、麻の需要が激減してしまつた今日でも、数軒の農家が昔ながらの麻の播種栽培を引き続いて行つてゐるからである。

この安蘇郡の地一帯が古代から麻の栽培に盛んであつたことは、『大日本地名辞書』坂東編（吉田東伍著）に「和名抄、安蘇郡麻統郷。今田沼町、赤見村、彦間村、新合村、三好村等にあたる。田沼の管内に小見の大字あるは、即麻統の遺唱なり。統紀、延暦元年五月、下野国安蘇郡主帳、外正六位下若麻統部牛養、授従五位下とあるを想へば、麻統郷は其若麻統部の住里なりし如し。又其若麻統部は、やがて麻を造りて、朝廷へ奉仕せる家にやありけん」とあるように、現在の安蘇郡田沼町大字小見を中心として、かつては満目麻畑を見るところであつた。そしてまた、安蘇郡界村大字馬門（現在、佐野市馬門町）には古くから「天命麻田明神」が祀られていて、秋には遠近の農民が新産の麻を捧げ祭る行事が見られたなど、麻の名産地であつたことが知られるのである。

ところで、麻畑にかかわる掲出歌の解釈であるが、現行の注釈書、テキストのおおかたは、ほぼ同じ態での解釈を施し（後で述べる）それが定着し定説化され、なんら問題とするところはないように見られている。

しかし、けれども私にはどうも第二句の「へまそむら」の語義、延いては「第二句と第三句との文脈関係」についても、従来の見解に疑問が生じ現在通行の解釈に強い疑念を抱くようになった。それは、加えて、農家の人たちの麻の取入れの様態を、長年つぶさに観察してきていることにもよるのであるが。

この小論は、これらの問題点を主体として種々の面から検討し、改めて解釈を試みようとするものである。

二

『萬葉集全註釋』（武田祐吉）は、

上野の国の安蘇のアサの束を抱えるように、かき抱いて寝ても飽きないのを、わたしはどうしたらよいだろう。

『萬葉集注釋』（澤瀉久孝）は、

上野の安蘇の麻の束をかき抱くやうに、あの子をかき抱いて寝ても飽かぬのを、何と私はしよう。

また、近年版行の『萬葉集全注』（水島義治）は、

上野かみつけの国の安蘇の麻束を抱きかかえるように抱いて寝ても、まだ飽きたらないが、この上、俺はいつたいどうしたらいいんだ。
と現代語訳している。

なかんずく、マソムラは、マは接頭語、ソムラは刈り取った麻の束と解釈し、上二句はカキムダキを引き起こす序詞としている。特に、上二句を序詞とするのは先の三著のみならず『萬葉集評釋』（窪田空穂）をはじめ、日本古典文学大系本『萬葉集』、新編日本古典文学大系本『萬葉集』、新潮日本古典集成本『萬葉集』、『詠注万葉東歌』（五唐勝）、対照『現代語訳万葉集』（桜井満）、および『校註万葉集東歌・防人歌』（水島義治）、『新選万葉集抄』（小野寛）など、ほとんどの注釈書、テキスト類がこの見解をとられている。そもそもマソムラを「刈り取った麻の束」とする見解は、私の見る限りでは、夙に『仙覚抄』が「マソムラトハ、苧ヲカリテ、ヒトイダキハカリツ、タハネヲキタル也。ソレヲトリハコフニハ、オホキナレハ、タヤスクモエトラテ、フシテカキイタケハ、ヨソヘヨメルナリ」と説いたことに始まっているように思われる。続いて『萬葉集管見』、『萬葉代匠記』がこの説を受け入れ、かつ『萬葉集童蒙抄』が「まそむらは真麻也。むらは集まれるを云ふ詞也。綿糸などの一抱をむらと云ふ也。圍の字屯の字をむらと言ふ也」

などと、数量呼称の用語に倣つての見解を示し、一層「刈り取つた麻の束」の意と決め付けられていったかのごとくである。

たしかに第三句「かきむだく」の対象を「まそむら」とみる見方からすれば、「まそむら」の意は「麻の束」としなければ、解釈上うまく意味が通らなくなるであろう。しかし、果してマソムラを「麻の束」と躊躇いもなく、短絡的な発想で解釈してしまつてよいものであろうか。

ここで、『萬葉集』ならびに同時代頃とみられる文学・歴史書などから「ムラ」の付く語句を拾ひ出し、それが「何々の束」の意を持つものとして通用されている例があるかどうか、『時代別国語大辞典上代篇』および諸古語辞典を手懸りにして検討してみることにする。

A表

見出し語	万葉仮名	訳語	巻・番号	語義
あぢむら	味村	あぢ群	3・三七	アヂ鴨の群。アヂ鴨はむらがつて住む習慣を持つ。
あぢむら	阿遅村	あぢ群	3・三六	
あぢむら	味村	あぢ群	4・四六	
あぢむら	味村	あぢ群	4・四六	
あぢむら	安治村	あぢ群	7・二九	

B表

見出し語	原文	訳語	出典	語義
いしむら	石礫	石群	神代紀・上第五段一書第八	〔たくさんの石〕(岩・小・角)。
いしむら	伊辭務邏	石群	崇神紀・十年九月。謠	〔多くの石〕(旺)。
いはむら	石村	石群	記・神代	

あぢむら	安遅牟良	あぢ群	17・三九一	
あぢむら	安治牟良	あぢ群	20・四六〇	
いはむら	盤村	岩群	1・三	群がった岩。岩の群。
くさむら	久草無良	草群	14・三三〇	草の生え茂つたところ。
こむら	樹村	木群	3・三三	群がり生えている樹木。また、そのところ。
すぎむら	杉村	杉群	3・四三	杉の群生。杉林。
たづむら	鶴群	鶴群	9・二九一	つるの群。
つきむら	槻村	槻群	3・三七	けやきの群がり生えているところ。
ひとむらはぎ	一村芽子	一群萩	8・二五五	一群の萩。

C表

むらきも	むらきも	むらきも	むらきも	見出し語
村	村	村	村	万葉仮名
肝	肝	肝	肝	訳語
群	群	群	群	巻・番号
肝	肝	肝	肝	語義
16・三六一	10・三三六	4・七三〇	1・五	
				ムラキモは群 ^{ムラ} 肝 ^{キモ} で、五臓六腑。

ほむら	ほむら	たかむら	ししむら	ししむら	いへむら	いはむら	いはむら	いはむら
焰	火	篋	肉	宍	伊幣牟良	磐	磐	磐
火	炎	藥	団		村	石	石	石
群	火	竹	肉	肉	家	岩	岩	岩
群	群	群	叢		群	群	群	群
日本靈異記 中巻、第十六話	神代紀・下、第九段、一書第三	崇峻前紀	日本靈異記 下巻、第十九話	日本靈異記 中巻、第十六話	記・履中・謠	祝詞、祈念祭	神代紀・上、第五段、一書第七	神代紀・上、第六段、一書第六
火焰。火 ^ホ 群 ^{ムラ} 。		竹が群 ^{ムラ} がつて生えている所。竹林。	肉のかたまり。ムラは群 ^{ムラ} 。	家が群 ^{ムラ} がつてある所。		群 ^{ムラ} がつた岩。		

むらとり	むらとり	むらとり	むらとり	むらとり	むらとり	むらたま	むらだち	むらたけ	むらさめ
武良等里	群	無良等理	群	群	村	牟浪他麻	群	村	村
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	立	竹	雨
群	群	群	群	群	群	群	群	群	群
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	玉	立	竹	雨
20・四七四	20・四九八	17・四〇八	13・三九一	9・二七五	6・二〇七	20・四九〇	9・二七五	19・四九一	10・三二六
群れをなす鳥。多くの鳥。						〔糸で貫き合わせた多くの玉〕(講)。	〔むらがり立つこと。一群になつて立つこと〕(小・角・旺)。	〔むらがり生えた竹〕(岩)。	驟雨。(俄かに激しく降つて来る雨)〔群がつて降る雨〕(岩・角)。
									〔にわか雨〕(小・講)。

むらなへ	武良奈倍	群苗	14・言ハ	〔群がり生えている苗〕(角・小・講・旺)。
むらやま	村山	群山	1・二	群がった山。多くの山々。

D表

見出し語	原文	訳語	出典	語義
むらくも	叢雲	群雲	神代紀・上、第八段(本文)	むらがり集まっている雲。
むらくも	藜雲	群雲	景行紀四十年十月	重なり合った雲。
むらとり	牟良登理	群鳥	記、上巻、須勢理昆売の嫉妬	群れをなす鳥。多くの鳥。

(注)各表の語義は『時代別国語大辞典上代編』による。しかし、大辞典に見出し語として挙げられてない項目は、他の古語辞典によった。その場合は「」を付け、下にその辞典名を「」で示した。(岩は『岩波古語辞典』、(小)は『小学館古語辞典』、(旺)は『旺文社古語辞典』、(講)は『講談社古語辞典』、(角)は『角川古語辞典』。

右のA・B表は「まそむら」と語の組み立てを同じくする、すなわち「むら」ということばが、ある語句の下に付いて出来た複合語(以下これを「下接語」と呼ぶ)を挙げ

たものである。

A表は『萬葉集』の中に見られる下接語で、延べ十四例が見出される(ただし、「まそむら」は除く)。見てのごとく「まそむら」と同様、草木に属する語句「くさむら」「こむら」「すぎむら」「つきむら」「ひとむらはぎ」は、草、木、杉、槻、萩のそれぞれが「群がり生えているところ」と解釈され、「束ねられているさま」の意は、どの古語辞典にも見当たらない。また、他の下接語「あぢむら」「たづむら」「いはむら」にしても、それぞれの「群れ」を意味しているのは自明のことで、「何々の束」の意は全く見られない。

B表は『古事記』『日本書紀』『祝詞』『日本霊異記』に見られる下接語で、延べ十二例見出される。そのうち、草木類に属する語は「たかむら」の一例だけであるが、この語句はいうまでもなく、その他の語句もそれぞれのものが「群がっている」さまの意とされ、これまた「何々の束」の意と解されているものは見当たらない。

以上の用語例から「むら」の下接語は、それぞれの植物が群がり生えている、あるいは鳥や物体が群がり集まっていることを意味しており、「何々の束」あるいは「束ねられた」状態の意に解することとは到底考えられない。

次に、下接語のみならず、「むら」がある語句の上に付

いて出来た複合語（以下これを「上接語」と呼ぶ）についても検討してみたい。

C表は『萬葉集』中に見える上接語で延べ十六例見出される（ただし「むらきも」「むらたま」「むらとり」は、集中ではそのすべてが、下に助詞へのを伴い枕詞として用いられているが、ここでは本来の形である名詞として取扱った）。

ところで、草木にかかわる語句は、「むらたけ」の一例に過ぎないが、いずれの古語辞典にも「むらがりはえている竹」と解され、「竹の束」あるいは「束ねられた竹」の意とするものは見当たらない。また、他の十五例も見ての通り、それぞれが「群れをなしている状態」の意味と解している。

D表は『古事記』『日本書紀』に見られる上接語である（『祝詞』『日本霊異記』には見当らない）。わずか三例に過ぎないが、これとて「むらがり集っている雲」、「群れをなす鳥」と解されており、「束なるさま」の意味は見られない。

以上、上接語においても「群がり集っている」意であることが確認できる。

これら『萬葉集』ならびに上代成立の文献に見える「むら」の下接語・上接語の用語例による徴証から、掲出歌の

詞へまそむらは「麻の群がり生えている状態」平たく言えば「麻畑」と解釈するのが正解といえよう。であれば、この「まそむら」だけを、特別に「麻の束」と解釈することは理に合わないし、また許されまい。そもそも、ムラは形状言であつて、ムレ（群）の交替形とされているから、こう理解することこそ正当であるはずである。その点、ごく最近発刊された『萬葉集釋注七』（伊藤博）では、二句に亘る口語訳が古説、従来説にとらわれることなく「上野の安蘇の群れ立つ麻」と、当を得た解釈をとっている。

ところが、『時代別国語大辞典上代編』（昭和四十二年十二月発行）には、へまそむらを「密生した麻」と解する一方、これに続いて「あるいは、麻を刈り取つて束ねたものの意か」とある。また『小学館古語辞典』（昭和六十年発行）にも「畑に植えた麻の密生したもの。もしくは、刈り取つて束ねた麻の意か。そして『旺文社古語辞典』（昭和五十六年発行）には「おい茂つた麻の一群。一説に、刈り取つてたばねた麻。『角川古語辞典』（昭和五十八年発行）にも「麻の密生している所。また、刈り取つた麻の束」とある。しかし、『岩波古語辞典』（昭和四十九年発行）には「一かたまりの麻類。またはカラムシ。『講談社古語辞典』（昭和五十六年発行）には「『ま』は接頭語。『そ』はアサ、『むら』は一かたまりの群れの意」アサの

密生している所」とあるだけである。

惟うに、『時代別国語大辞典上代編』の「麻を刈り取つて束ねたものの意か」、『小学館古語辞典』の「刈り取つて束ねた麻の意か」というような不確かな形(疑問の語を付けて)でもつて書き添えている理由は、前述のごとく、『仙覚抄』が「マソムラトハ、苧ヲカリテ、ヒトイダキハカリツ、タハネヲキタル也……」と説いたのを初めとして、契沖が『萬葉代匠記』に「麻素武良ハ真麻村ナリ」とし、続いて『童蒙抄』が「むらは集まれるを云ふ詞也。綿糸などの一抱をむらと云ふ也。圍の字屯の字をむらと言ふ也。(中略)むらとは一まとめにしたるを、糸綿の類を幾むらと云へば……」。そして、『古義』に「麻素武良は、本居氏、真麻屯にて、麻を束ねたるを云べし、と云り」とあるなど、仙覚の見解が近世以降の国学者たちに継承され、かつ『萬葉集上野国歌私注』(昭和十九年発刊)に「ムラは紵又は麻の繊維の屯積一団と解する」とあるのをはじめとして、現代萬葉学の草創とも云うべき二大注釈書である『萬葉集全註釋』(昭和二十四年。増訂版昭和三十二年三月発刊)に「アサの群で、刈り取つたアサの束をいう」。

『萬葉集注釋』(昭和四十年三月発刊)にも「麻の群れで、麻の束である」と、語釈項目に述べられ、かつそれぞれの口語訳にも適用され(前記参照)、この説が一般に通用さ

れてきたからにはほかならない。そして、遂には『旺文社古語辞典』、『角川古語辞典』のごとく「たばねた麻」あるいは「麻の束」と決め付けてしまったのであろうと私は推察する。

しかも、なおかつ「麻の束」とする解釈を強化ならしめたのは、もう一つの見解の加勢によるとも考えられる。それは「あそのまそむらかきむだき」の文脈関係を、「へあそのまそむら」を「へかきむだき」とする採り方である。すなわち、かき抱く対象をまそむらとする見方である。これもまた『仙覚抄』に「ソレヲトリハコフニハ、オホキナレハ、タヤスクモエトラテ、フシテカキイタケハ、ヨソヘヨメルナリ」と述べていること。わけても、江戸後期に発行された『上野歌解』(橋本直香)が「麻は初め苧物に非ず、引堀て後根を払也其掘にこゝ時透間なく群生ひたる麻を左右の手して大抱に抱へて、懐きながら後へ寝るやうにして掘、云々」との解説ぶりに、より一層「束ねた麻」(引き抜くにあたって一纏めにした麻束)の意へと増幅されたようである。そして、この説の敷衍によるのか『万葉開眼(下)』(土橋寛)には「麻を引き抜くには、両腕で麻の茎を抱きかかえ、体を後へそらすようにして抜くのである云々」と解説しているような按配である。実は、この直香の説明は鈴木千本という人の言を鵜呑みにしたものであり、土橋寛の解説もご自身が云うように(「東歌の世界」『短

歌』昭和四十二年六月、土橋寛論文集上『萬葉集の文学と歴史』所収)、渡辺和雄の言を借りたもので、麻取入れの状況を実際に見聞していないところに大きな誤りがあるのである。

三

ここで、農家の人たちが麻の木を畑から根こそぎ引き抜く時の要領・手順の実態を述べてみよう(近年、労力の関係からか、農家によっては根こそぎ引き抜く方法をとらず、麻の根元から刈り取る仕方が採られつつあるが)。

まずはじめ、目の高さぐらゐのところの麻の幹部を五く六本両手で一つにまとめるように掴み、それから徐徐に体をあとずさりしながら、掴んでいる手は麻の木の上部へと移し麻全体を横ざまに倒してゆき、幹の上辺部を脇腹にかかえ持ち、そして、ぐいー、ぐいーと力一杯根こそぎ引き抜くのである。

多くの注釈書がいうように、両手[、]ないしは両腕[、]で抱いて、のぞけるようにして引き抜くのでは、決してないのである。実際その作業にたずさわる農家の人たちに尋ねても「麻を両腕でかかえ抱くような姿勢では、全然力が入らず、根の張っている麻は、とても根こそぎ抜けるものではない」と、口を揃えて答えるのである。

にもかかわらず、^{新編}日本古典文学全集本『萬葉集』が「その抱きついたまま体を倒すさまが男女の抱擁に似るところから、云々」とは、一体、どこでどう観察してきての解説なのであるうか。私が今迄見てきた麻の取入れ作業の詳察からは、一向にそのような格好は見られないのである。だから、もし麻を根こそぎ引き抜く作業の姿態描写とすれば、「かきむだき」でなく「たばさみて」とでもうたうはずである。

萬葉集をはじめ同時代の文学・歴史書からの用語例、そして農民たちの麻の取入れ作業の様態から合わせ考えて「まそむら」の意は「麻の束」ではなく「群生している麻のさま」を表現したもので、その場所をうたった実景描写と私は考察するのである。この考察は北村季吟が『萬葉拾穂抄』に「あそのまそむら、所の名をい懸しとにや。あなちち芋をたはねし義にかかはらず」とあるごとく、追窮ずじまいであったが、場所説を提唱していることに、図らずも通ずるものようである。

それにまた、萬葉歌はその殆どが五七調であり、当該歌も第二句目で一旦切れていると考えられる。そうした韻律的な形式上から推してみても、上二句は次の句「かきむだき」せし、その「場所」を示したものと考察するのが自然であろう。されば、第三句「かきむだき」の対象は、詠み

手(男)の相手である「女人」であることは云うまでもあるまい。

ちなみに、諸注釈書が上二句を序詞とした理は、「かきむだき」の対象を「まそむら」と考えたからに違いあるまい。そう見るからには「まそむら」の意を「麻の束」としなければ、解釈上、意味が通じなくなってしまうからであろう。しかし、縷縷述べてきたように「まそむら」が「群がり生えている麻」の意であるからには、上二句の序詞説は成り立つまい。

四

足柄のをてもこのもにさす翼のかなる間しづみ兒る我
紐解く (三三六一)

赤見山草根刈り除けあはずがへ争ふ妹しあやにかなし
も (三四七九)

梓弓欲良の山辺の繁かくに妹ろを立ててさ寝処払ふも
(三四八九)

に代表されるように、東歌には野外での男女相会を如実に物語っている歌が多く見られる。しかも、うたわれているように、生い茂る草叢や樹木の陰が恰好の媾曳の場であったことを思いやると、三メートルを越すほどに繁茂し、そこに入り込むと、外部からは全くうかがい知ることのでき

ない密生した麻畑は、草叢、樹木のかげ以上に「語らない空間、交驪の場」となったことは充分考えられよう。

されば、先に見てきたように、へむら」の下接語、上接語の用語例、加えて、農家の人たちの麻取入れの作業様態からも合わせ考えて、第二句「あそのまそむら」は安蘇地方の麻の群がり生えている所、それは男女相会の場所を示す歌詞で、第三句「かきむだき」の対象は、共寝する女人であることは、ことさら言を要することもあるまい。

そしてなお、第一、二句のありようが、カミツケノという大地名、アソといふ小地名、そしてマソムラという究極の場へ、すなわち大地名からだんだん局地へと絞り込んで行く方式である点からみても、へマソムラ」が場所を示すものであることが推察されるのである。

ましてや、この方式は当該歌と全く同地の歌である「下毛野、安蘇の河原よ」(三四二五)の形式と同じであることをも認識すれば、一層アソノマソムラが「場所」を表現している歌詞であったことは間違いないであろう。

以上から、掲出歌は次のように口語訳するのが当を得たものと考えられる。

上毛野の安蘇の麻畑の群がりで、おまえをしつかと抱いて寝るけれど、それでもまだまだ満足し切れない。
ああ、この上俺はどうしたらいいんだらうか。